

2週間前の昨年度終業式にも、東日本大震災の話をしました。その時にも少し触れましたが、「こころは誰にも見えないけれど、こころづかいは見える。思いは見えないけれど、思いやりは誰にでも見える」というフレーズが、この1カ月近く、テレビで何度も繰り返し流され、今も流れています。

この言葉は、埼玉県生まれの詩人であり、皆さんがよく知っている、クリスマスソングの定番である「ジングルベル」の訳詞家でもある「宮澤章二」という方が書かれた「行為の意味」という詩の中の一節です。

これからその詩の全文を紹介します。短い詩ですから聞いてください。

「行為の意味」を朗読（著作権に抵触するため掲載は省略）

実はこの宮澤章二さんは、6年前の偶然にも東日本大震災が起こった同じ日付の3月11日に、85歳で亡くなっています。それからちょうど6年が経った現在、大震災で悲しみや不安にさいなまれ、希望を失いがちな私たちに、人として大切なことを伝えるためにこの言葉が蘇ってきたと、私はそう思っています。悲惨な出来事の後、人としての労わりや優しさの心を思い出させてくれました。

確かに、いま皆さんの隣に座っている人が、何を思っているか、何を感じているかはまったくわかりません。しかし、ちょっとした心づかひや思いやりが行為で示されると、その人の思っていること、感じていることが伝わってきます。その人の心が見えてきます。

本校3年間で皆さんに必ず習得してほしい事は、何よりも「確かな学力」ですが、それだけでなく、感じていることや自分の思いをさりげなく相手に伝え、社会を思いやりの温かい空気で包んでいける人間としての資質も、忘れてはならないと思います。それは本校の目指す「豊かな人間性」であり、また一般に「良識」といわれる大切なものでもあると思います。

現在の私たちの日常生活は、自然の持つ大きな力に対しては、非常にもろい基盤の上に立っていることが、今回の大震災で図らずも露呈しました。

しかし、われわれ日本人は、一人一人が希望を持ってしっかりと前を見据え、思いやりと優しさの精神を持ち続けて、社会の復興にあたっていく強い心が必要です。

日本社会がこの未曾有の難局を迎えている今、高校生の皆さんはその真只中に生きています。このような時だからこそ、閉塞感を打ち破る新しい英知と団結、そして皆さんの若く力強いエネルギーが必要とされています。

この始業式にあたり、是非とも皆さんは、今学ぶことの大切さを考え、自覚し、どうかこの東高で深く学び、人間としての豊かな心を広げ、将来の社会に貢献できる、社会のリーダーとなるにふさわしい人間になっていただきたいと、強く願っています。



(西門の桜)